

第2部 随筆(作文) テーマ「ごはんのにおい」

一般の部

木島平村長賞

美人になあれ

阿部千波

「わあ、いいにおい！ごはんのたけるにおいで最高」

「お母さん、ごはんの湯気をあびると美人になるんだよね」

鼻腔をくすぐる甘い香りをかぎながら、お釜の向こうに座る母に声をかける。

「やけどしないように気をつけてね。お米の力で美人になあれ」

手であおって、湯気をあびせてくれる母の顔は曇っているが、優しい笑顔ということが分かる。

「ぼくぼくぼく…半分つぶせば『半ごろし』全部つぶせば『みなごろし』」

即興で節をつけながら、すりこぎで、うるち米

ともち米と一緒にたいたごはんをつぶす。一口サイズにちぎったミニミニ半ごろしを私の口にほおりこんでくれる母。かめばかむほど口の中に広がる甘み、鼻に抜ける香りが私の心を満たしている。半ごろしをあつあつのうちにどんどん握っていく母。ごま、きな粉、スプーンでころころまぶすのは私の役目。おいしくなあれ、おいしくなあれと念じながら。お肌は見えないように粉の洋服をたっぷりまとった半ごろし。あんこはさらしの上を広げて半ごろしをのせて、くるんとすれば出来上がり。

お彼岸が近づくと思いつく光景だ。半世紀も前にもなるのかと、ふと自分の重ねてきた年を思う。秋は萩の花でおはぎ。春はぼたんの花でぼたもち。同じものなのに季節によって呼び方が違うことは母から教わった。旅人をもてなすために老夫婦が「明日は半ごろしにしようか、みなごろしにしようか」と相談する民話も母が話してくれた。

昨年の秋彼岸は、「ぼくぼくぼく…」と母と歌った。半ごろしを丸めるのは私。亡父に供え、洗めのお茶を入れて二人で食べた。あれから一年。施

設に入った母。外泊が叶ったなら、たきたてごはんの甘い香りをあびて「美人になあれ」って言い
あいたいなあ。